

現代フランス語における je sais と je connais 一言語運用の観点からみた類義動詞学習への示唆

川口 裕司

東京外国語大学外国語学部教授

1. はじめに

現代フランス語には日本語で言うところの「知る, 分かる」を表す動詞として *savoir* と *connaître* がある。両者は基本動詞であり, 出現頻度も高く, 初級フランス語の文法教本の中に必ず出てくる。そして多くの教材はこの2つの動詞に独立した項目を設けている。試みにフランス語で書かれた一般的な2冊の文法書を見てみよう。

たとえば Delatour Y. et al. (2000). *Grammaire pratique du français en 80 fiches*, Paris, Hachette. (以下 80 fiches と略す) の解説が典型的な例と言える。29 の文法テーマを全体で 80 の見出しに整理したこの初級文法書は, 第 11 番目のテーマに「いくつかの重要な動詞 *Quelques verbes importants*」を掲げ, その筆頭に *Savoir / Connaître* を挙げている。¹ Grégoire M. et Thiévenaz O. (1995). *Grammaire progressive du français avec 500 exercices*, CLE international. (500 exercices と略す) においても *savoir* と *connaître* は独立した項目として扱われている。いずれの教材においても, 語彙意味論的観点と統語論的観点の2つの観点から解説がつけられている。

500 exercices では, まず「*savoir* と *connaître* は能力と知識を表す。」²と記述することで, 両者の意味に一定の共通性があることを学習者に示唆する。その後で, 「*connaître* は常に名詞と, *savoir* は一般に動詞あるいは動詞構文とともに使用される。」³と説明し, 2つの動詞が統語論的に異なるふるまいを見せることを指摘する。ところがその後, 手のひらを返したように解説は一転し, 実は *savoir* も名詞をとることがあり, その場合には「記憶により学習されたことから *les choses apprises de mémoire* («par cœur»)」を表すことが追加される。たとえば以下の例では *il sait* は直接目的語の名詞を従え, 「彼は暗記している」という含意がある。

¹ Delatour Y. et al. (2000). p.58 を参照。

² Grégoire M. et Thiévenaz O. (1995). p.112: «SAVOIR» et «CONNAÎTRE» expriment l'**habileté** et la **connaissance**.

³ *ibid.*, p.112: «**Connaître**» s'utilise toujours avec un **nom**, «**savoir**» s'utilise en général avec un **verbe** ou une construction verbale:

(1) Il sait mon numéro de téléphone. 彼は私の電話番号を知っている（暗記している）

一方 80 fiches の解説は 500 exercices と異なり，統語論的解説と語彙意味論的解説を合体させた形になっている。

まず savoir に，「savoir＋不定詞」と「savoir＋従属節」のような2つの統語論的可能性が設定される。次に，この統語的ふるまいの違いが，savoir の語彙意味論的相違と1対1に対応すると説明を加える。すなわち「savoir＋不定詞」では，savoir は「することを学んだことがらを行うことができる」⁴という意味になり，「savoir＋従属節」における savoir は，「明確な点に関する知識をもっている」⁵ことを意味する。

これに対して connaître には「connaître＋ことごと」と「connaître＋人」の2つの統語論的可能性を想定する。前者の場合，connaître は「ことごとを同定する，あるいはことごとの経験をもつ」という意味で，後者は「人を同定する，あるいはその人と社会的関係をもつ」⁶ことを表す。

結局のところ，500 exercices と 80 fiches をテキストとして学ぶ学習者では，同じ類義動詞について，それぞれ異なった内容を学ぶことになる。500 exercices は savoir と connaître が共通の意味を持ちつつも，統語的ふるまいが異なると説く。これに対して 80 fiches では，統語的ふるまいの違いは同時に意味的相違に対応すると説く。

基本動詞とされる savoir / connaître の文法記述にこうした違いが見られる点は興味深い。また 500 exercices が指摘するように，両者は統語的にも似たふるまいをすることがある。しかるに 80 fiches はその点については黙しているのである。確かに savoir / connaître の類義性と統語的な類似性は，複雑かつ困難な問題であり，上掲のような一般向けの文法書は，むしろ初学者への配慮から，それぞれに異なった説明法を見出したとも考えられる。しかしながら後述するように，筆者は上掲の文法書の解説では重要な言語事実が見落とされていると考える。以下では savoir / connaître の言語分析を概観するとともに，その重要な言語事実を指摘し，そこから類義動詞の savoir / connaître をどのように学習すればよいのかについて若干の私見を述べたい。

⁴ Delatour Y. et al. (2000). p.58: = être capable de faire quelque chose qu'on a appris à faire

⁵ ibid., p.58: = avoir une information sur un point précis

⁶ ibid., p.58: 前者は = identifier ou avoir l'expérience d'une chose, 後者は = identifier quelqu'un ou avoir des relations sociales avec quelqu'un

2. 類義動詞 savoir / connaître の研究

savoir / connaître に関する主な先行研究には Rémy-Giraud, S. (1986), Dhorne F. (1986), Tamba-Mecz I. et Dhorne F. (1988), Trubert T. et Oguma K. (1992), などがある。これらによって両者の相違については様々な言語事実が明らかになっている。

2. 1. 統語的制約

全ての研究が異口同音に説いていることだが, connaître には次の 1 と 2 のような統語論上の大きな制約がある。ところが savoir にはそのような制約はない。

1. connaître は助動詞のように機能し、後ろに不定詞を伴うことができない。

(2) Il **sait** très bien parler le français.

彼はとても上手にフランス語を話すことができます。

(2') *Il **connaît** très bien parler le français.

2. 現代フランス語では, connaître は従属節をとらない。⁷

(3) Je **sais** qu'il s'est marié.

彼が結婚したことを私は知っている。

(3') *Je **connais** qu'il s'est marié.

こうした統語上の制約は一般的なものであるが、まれに、以下のような文脈で connaître が従属節をとることもある。ただし一般的には(4)は elle reconnut que...で表現される。J. Picoche et al., *Dictionnaire du français usuel* (2002)の savoir et connaître の項を参照。

- (4) Sur les tempes de son accompagnateur, deux petites cornes se hérissaient;

c'est ainsi qu'elle **connut** que son accompagnateur n'était autre que le diable.

同伴者のこめかみに2つの小さな角が飛び出していた；こうして彼女は同伴者が悪魔以外の何者でもないことを知った。(G. Perron-Louis, *Contes et légendes de Bourgogne*, 1962, p.171)

上記の例は頻度の点からも例外的であり、一般には「savoir＋従属節」は「connaître＋名詞」

⁷ connaître は古くは従属節をとることができた。

に対応すると考えてよい。

(5) **Savez-vous pourquoi elle est absente?**

彼女が欠席しているのはなぜか知っていますか。

(5') **Connaissez-vous la raison de son absence?**

彼女の欠席の理由を知っていますか。

savoir に後続する従属節 *pourquoi elle est absente* は、connaître の文では名詞 *la raison* 「理由」に対応する。こうした2つの異なる統語的ふるまいを見る限り、savoir と connaître は類似する動詞ではなく、お互いに相手を補完し合っているペアのように思える。他方、後ろに直接目的語の名詞がくると、両者は類義動詞と呼ばれるにふさわしいふるまいを示す。

2. 2. savoir / connaître + 直接目的語

不定詞や従属節をとる場合と反対に、直接目的語をとるときは、savoir に多くの制約がみられるという点で先行研究は皆一致している。

savoir の直接目的語には「生物 animé」を表す名詞⁸ や「無生物の抽象物 non animé abstrait」が来ない。⁹ Rémy-Giraud はこう述べた後で、savoir / connaître の統語的制約と意味的制約の間には、ある種の経済原理が成り立っていると結んでいる。

savoir には従属要素が後続し、形態統語的構文が豊かである、その分だけ意味的文脈が貧弱になる；connaître には「生物」や「具体的無生物」の特徴をもつ（目的語）名詞句が後続でき、意味的文脈が豊かである、その分だけ形態統語的構文が貧弱である。

(Rémy-Giraud, S. (1986), p.198.)¹⁰

Rémy-Giraud は savoir / connaître が類義的ペアになる2つの場合を想定し、1つを「見せかけの同義性」、もう1つを「真の同義性」と呼んで区別した。¹¹ たとえば(6)と(6')の類義的

⁸ ただし文学的レジスターでは、connaître の意味で savoir を使用することがあり、savoir が人間を表す直接目的語を従える。Je sais peu d'hommes aussi héroïques que Jean Moulin. 「ジャン・ムーランほど英雄的な人間を私はほとんど知らない。」 Pougeoise (1996), p.380.

⁹ Rémy-Giraud, S. (1986), p.196.

¹⁰ - savoir étant plus riche en construction morpho-syntaxique puisqu'il admet d'être suivi d'un constituant P, mais plus pauvre en contextes sémantiques; - connaître étant plus riche en contextes sémantiques puisqu'il admet d'être suivi de SN ayant le trait "animé" et "non animé concret", mais plus pauvre en constructions morpho-syntaxiques.

¹¹ ibid., p.270.

なペアは見せかけであるという。

(6) Je **sais** la profession de Pierre.

私はピエールの職業を知っている。

(6') Je **connais** la profession de Pierre.

類義性がみせかけであるというのは、(6)において *je sais* 「私は知っている」というとき、それは私がピエールの職業のことを、たとえば「彼は医者だ」のように口に出して言えるということを表す。「知っている」は「口に出して言うことができる」の意味である。一方、(6')の *je connais* 「私は知っている」は、ピエールの職業が何であるのかを理解するために必要な知識やイメージを私が手に入れていることを表すのだという。

目的語が表す対象を「発話として口に出して言える」という意味論的性質が *savoir* にあることは、Dhorne F. (1986)や Trubert T. et Oguma K. (1992)も指摘している。たとえば(7')が文法的な文と言えないのは、「バスク文学」というものを口に出して言うことができないからである。Picoche の説明はもっとすっきりしており、教科や分野を全体として言うときには *connaître* しか使えないという。Picoche et al. (2002), p. 参照。

(7) Pierre **connaît** bien la littérature basque.

ピエールはバスク文学をよく知っている。

(7') *Pierre **sait** bien la littérature basque.

上述の「みせかけの同義性」に対して、Rémy-Giraud は (8) と(8')のような例を「真の同義性」を表すと考える。

(8) Je **sais** l'anglais.

私は英語がわかる

(8') Je **connais** l'anglais.

しかしながら、ここでも「発話として口に出して言える」かどうかを利用して、両者の意味的な違いに言及することが可能であろう。とくに「*savoir* の多くは *apprendre* 「学習する」の結果を表す」とする Dhorne (1986)の見解は、この場合たいへん説得力がある。すなわち(8)は「学習の結果として英語を話すことができる状態」を意味し、(8')は「英語についての知

識や経験があること」を示していると言えよう。このように考えると、(8)と(8')の例が Rémy-Giraud が「同義ではない」とする(9)と(9')の例とどのように違っているのか、その意味的相違は必ずしも明確ではないように思える。

(9) Il **sait** tout. = Il est très instruit. 彼はとても知識がある。

(9') Il **connaît** tout. = Il a beaucoup d'expérience. 彼は経験が豊富だ。

また、Jean a connu la guerre et la faim. 「ジャンは戦争と飢えを経験した。」のように、あるタイプの経験を述べる時も connaître しか用いることができない。Picoche et al. (2002), p. 参照。

3. 言語運用の観点からみた savoir / connaître

2. で概観した言語分析から明らかなことであるが、savoir と connaître の統語論的なふるまいの違いは、この2つの類義動詞を学習するうえで、最も重要な事項の1つであると言える。その意味では最初に引用した2つの文法教本は適切な学習方略を立てている。とくにこの2つの動詞の違いを解説するために 80 fiches が採用した解釈はたいへんわかり易い。

savoir: 「savoir+不定詞」と「savoir+従属節」

connaître: 「connaître+ことがら」と「connaître+人」

savoir には不定詞句と従属節が続き、connaître には名詞が後続するという図式は、学習者にも分かりやすく、覚え易い。

しかし当然のことながら、2. で見たように言語分析の立場からすれば、このような図式化はすこぶる安直なものであり、savoir と connaître の統語的ふるまいを十分に理解した解説とは言い難い。確かに2. 2. のように2つの動詞はともに直接目的語を従えることが可能であり、しかもその場合に savoir / connaître の類義性が問題になったからである。

ところで2. 2. で見たような類義動詞の言語分析は、それ自体としての言語学的意義もさることながら、音韻論における最小対と音韻対立の議論におけると同様に、ペアとなる文が実現される文脈の存在が理論的に設定される。逆に言えば、そうした文脈の存在があって、初めてペアとなる例文が理論的に設定されるのである。しかるに理論的に想定された文脈が日常的な言語使用とどのような関係にあるのかは、ほとんど論じられない。それは、暗黙裡に、あるいは母語話者の直観によって、あるいは言語資料の中に、

想定された文脈が存在しうると考えるからであろう。

音韻論では、その位置づけはもちろん異なっているが、理論的に想定された文脈と現実の言語運用の関連性がしばしば議論の対象となってきた。たとえば音韻分析における擬似対をどのように扱うか、あるいは音韻対立の機能負担をどのように考えるか、などのテーマがそれである。最小対が日常的な言語使用において見出されることが少ないために、しばしば音韻分析においては擬似対の利用が検討される。また音韻体系が記述された後に、機能負担を手がかりに、十全な対立、不安定な対立、中和の可能性といった、音韻対立の階層化が行われるが、音韻対立の機能負担は対立の頻度と実際の使用を考慮にいれつつ決められるのである。学派により程度の差はあるものの、音韻論では一般に理論的に想定される音韻対立とその実際の言語使用の間の関連性が考察される。

こうした音韻論の原理がそのまま適用できるとは思えないが、筆者は *savoir / connaître* の分析においても、2. 2. で見たような言語分析だけでなく、音韻論における同様の言語使用との突合せが必要になると考える。以下では、そうした言語分析と言語使用の関連性を検討するとともに、その成果をどのように文法教材に反映させることができるのかを考えたい。

3. 1. 話ことばコーパスと *savoir / connaître*

ここで扱う言語使用データとは、現代フランス語の延べ 201 時間 (111 万語) の話ことばコーパスのことである。これらは資料 2 に掲げた 3 つのコーパスから成る。いずれも 1960 年代末から 70 年代半ばにかけて、イギリスのフランス語教員たちが行った録音データを文字化したものであり、約 1 世代前のフランス語の話ことば資料と言える。現在、その 3 つのコーパスは、ルーヴァン・カトリック大学文学部言語学科のサイト、口頭コミュニケーションの言語研究 *Etude Linguistique de la COmmunication Parlée, ELICOP* に掲載されており、検索ツールも 3 種類用意されている。本研究のために資料の利用許可を与えていただいた同言語学科に感謝したい。

本論考では試みに、*savoir / connaître* の直説法現在 1 人称単数形、*je sais* と *je connais* だけを検索した。また出現数をほぼ同数にするために、*je sais* については 3 つのコーパスのうちの 2 つ (*je sais* 1 はトゥール・コーパス、*je sais* 2 はオーヴェルニュ・コーパスを表す) だけを対象にした。結果として *je sais* は 160 例、*je connais* は 166 例が見つかった。これらの例を動詞の後に続く目的語要素に基づいて分類したのが表 1 である。

まず、表 1 を見るとすぐに気づくことであるが、直接目的語の名詞が後続するような文脈において *je sais* と *je connais* が共起することはない。上掲の文法教本 80 fiches が示したよ

うに、名詞の直接目的語を従えるのは *je connais* だけである。表中の無生物名詞と生物名詞の列を参照のこと。これに対して *je sais* の方は直接目的語が後続する例は1つもなく、*que* や様々な疑問詞の従属節や不定詞を従えていることが分かる。表中の最も左の列の *si*, *que* から中央の *comment*, *combien* に至る列を参照されたい。また従属節のうち、*si* を伴う間接疑問文（以下の(10)のような例）と *que* の従属節の2つで、*je sais* の現れの35%を占めていることも注目すべきであろう。話ことばにおける *je sais* の実現形の3つに1つは、間接疑問文か *que* の従属節なのである。

表1 *je sais* ～/ *je connais* ～の目的語要素
—話ことばコーパスの分析結果—

	<i>si</i>	<i>que</i>	<i>ce que</i>	<i>quel</i>	不定詞	<i>pourquoi</i>	<i>où</i>	<i>comment</i>	<i>combien</i>	目的語なし	<i>N le V</i>	<i>ce qui</i>	<i>ça</i>	無生物名詞	生物名詞	不明	出現数
<i>je sais</i> 1	5	6	3		1			1		16							32
<i>je sais</i> 2	25	20	3	4	4	3	3		1	64	1						128
合計	30	26	6	4	5	3	3	1	1	80	1						160
%	19	16	4	3	3	2	2	1	1	50	1						100%
<i>je connais</i>										30	3	1	3	53	75	1	166
%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	2	1	2	32	45	1	100%

(10) *je sais pas si les gens sont assez bien n éduqués...* [auvergne/fafl9bk8.txt]¹²

私はその人々がかなりよく教育を受けているかどうか知らない。

このように考えると、2. 2. の言語分析において扱われた「*savoir / connaître* + 直接目的語」のペアは、いわば理論的に仮定された類義動詞のペアなのであって、比喩的な言い方

¹² 以下の例文は、全て、資料2の話ことばコーパスからの引用である。人名と思われる部分はすべて***とした。

をするならば、音韻論における最小対のようなものであり、あらゆる文脈において実現されるわけではないことが分かる。少なくとも本稿が扱っているフランス語の話しことばの文脈においては、「je sais / je connais+直接目的語」というペアは、ほとんど実現されることがないか、少なくともよくお目にかかるような対立ペアでは全くない。さらに言えば、フランス語の話者は、現実の言語使用において、「je sais+直接目的語」と「je connais+直接目的語」のペアを比較対照しなければならないような文脈や場面にほとんど遭遇しないであろう。結局のところ、2. 2. で概観した類義動詞の言語分析は、savoir と connaître の類義性の理論的枠組みを提供する分析ではあるが、実際の言語運用とは距離を置いた分析であることは否めない。

話ことばコーパスの分析結果は、je sais が不定詞と従属節をとり、je connais が直接目的語の名詞をとるということを明瞭に示している。¹³上掲の 80 fiches は savoir と connaître のこうした統語的機能の違いを学習させることに主眼が置かれており、その意味で言語使用を反映した教材作りがなされていると言える。しかしながら、上掲の教材においても、見落とされている言語運用がある。

それは je sais と je connais がともに直接目的語の要素を従えることなく、以下の(11)と(12)のように、独立して使用されるという点である。しかもその頻度は je sais が全ての現れの半分、je connais も全体の 19%がこの独立的使用となっている。¹⁴

(11) **je sais pas** en France on a beaucoup tendance à à classer par rapport aux autres pays européens... [tours/faf01gb4.txt]

わからないけど、フランスでは他のヨーロッパの国々と比較して分類する傾向が強い。

(12) je vois je vois où ça se trouve mais **je connais pas**. [orleans/t015.txt]

それがどこにあるかはわかるけど、知らない。

¹³ 1 例ではあるが、je connais が間接疑問文を従えているように分析できる例があった。...je ne peux pas de en parler je serais ni objective euh je **je connais** trop peu ce qui s'y s'est passé. [orleans/t029.txt] 「・・・私はそれについて言えないわ、客観的にはなれないでしょうし、その、何が起きたのかはほとんど知らないの。」Rémy-Giraud も connaître は ce que と共起しにくいものの、不可能とは考えていない。?Je connais ce que tu as posé sur la table, ce que tu manges. Rémy-Giraud (1986), p.240.

¹⁴ ただし 19%の中には数件であるが、以下の例のように後の文脈から直接目的語の名詞が後続する可能性のあった例も含まれている。...je peux pas vraiment je peux pas vous dire. et **je connais** ...ah voilà faut pas dire que **je connais** bien la ville. [orleans/t015.txt] 「・・・私は本当に言えません。それに分かって、・・・そう町がよく分かっているなんて言うてはいけませんね。」

本稿が対象とした話ことばコーパスを観察する限りでは、**je sais** と **je connais** の類義性が問題になるのは、直接目的語が後続する文脈ではなく、むしろこの独立して用いられる文脈であることが明らかになる。確かに独立した使用において、両者がどのように違っているのか判然としない例がある。

(13) - ...euh **je sais** pas comment le traduire en français l'importance d'être *** the importance of being ***.

ええっと、the importance of being *** (***であることの重要性)をどうフランス語に訳していいのかわかりません。

- non non **je connais** pas. いいえ、わかりません。 [orleans/t029.txt]

(14) - ...il n'y a pas d'autres personnes qui ont de l'influence à Orléans par exemple? parce que moi **je connais** pas .ah....

たとえばオルレアンに影響力のある他の人はいませんか？私は知りません。あつ・・・

- **je sais** pas. 知りません。 [orleans/t140.txt]

いずれも2番目の発話が、それぞれ- non non **je sais** pas.と- **je connais** pas.でも問題がないと思われ、この場合には両者は類義的であると考えられる。

2. 2. で触れたように **je sais** の後には無生物の抽象名詞が後続することはない。我々の話ことばのコーパスにおいても、中性代名詞の *ça* を従えるのは常に **je connais** であった。¹⁵

(15) oui **je connais** ça et.... [orleans/t020.txt] ええ、それは分かっています、それに・・・

(16) ah **je connais** pas ça [auvergne/faf19bk5.txt] ああ、それは知りません。

ところが *ça* が先行する文脈は **je sais** と **je connais** のいずれにも見出され、この場合にも両者は類義的な動詞のペアである。

(17) – mais pourquoi donc それにしてもなぜ？

¹⁵ 3例のうちの1例は、関係代名詞の先行詞である。...tout ça que **je connais** eh bien... [orleans/t051.txt] ・・・・私が知っている全てのことは、つまり・・・

- ah ça **je sais** pas [auvergne/faf19bk5.txt] それは分かりません。

(18) il y a des mots qui s'appellent ou même qui s'écrivent pas la même chose.

同じもような名前ではない，あるいは同じように書かない単語もあります。

- oui ça **je connais** par expérience pesonnelle. [orleans/t105.txt]

ええ，それは経験上知っています。

しかしこの文脈においても，以下の例から明らかなように，**je connais** は許容範囲が広く，直接目的語との統語論的な結合可能性は **je sais** に比べてはるかに高い。

(20) ah oui Ronchamps **je connais**. [orleans/t002.txt]

あつ，ええ，ロンシャンは知っています。

(19) euh non ah celui-là **je connais** pas [auvergne/faf19bk1.txt]

ええっと，いえ，あつ，それは知りません。

3. 2. 統語論的な機能分担と干渉域

先にみた表 1 について，直接目的語のタイプを X 軸に，その出現率を Y 軸にしてグラフ化したのが図 1 である。

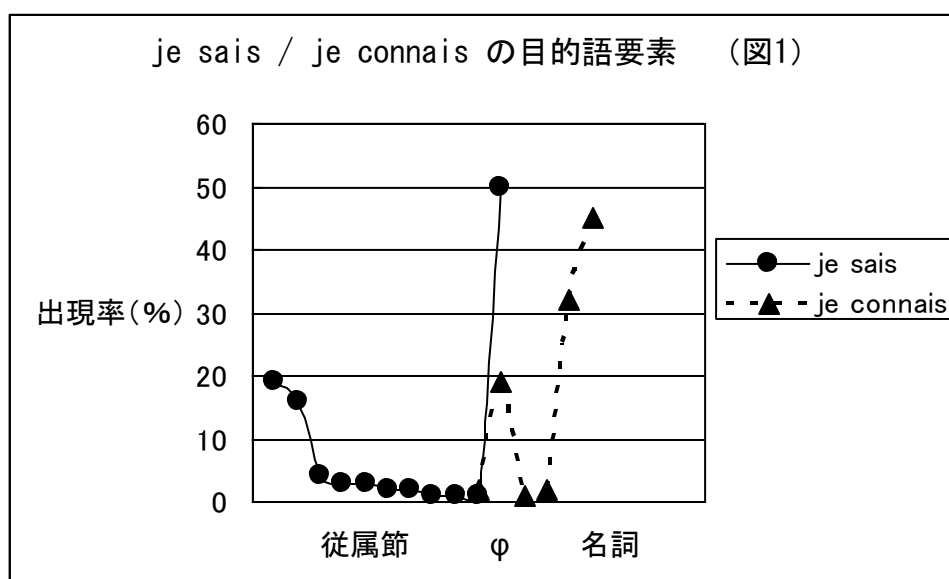


図1から *je sais* と *je connais* の直接目的語要素は、大きく3つのタイプに下位分類される。最初のタイプは従属節であり、ここには不定詞も含まれる。図1によると、*je sais* が従属節を従える機能を担っており、*je connais* にこの機能のないことがわかる。第2のタイプは後続する目的語が存在しないタイプ（図中のφの部分）である。目的語が動詞に先行する例もここに分類される。出現率は明らかに *je sais* が高いが、*je connais* も少ないわけではなく、両者が同一の文脈で現れる可能性を示唆している。例(13)と(14)を参照のこと。第3のタイプはいわゆる名詞が直接目的語となる文脈であり、*je connais* に名詞を従える機能があり、*je sais* にはないことが見て取れる。

以上のことから、*je sais* と *je connais* の目的語要素に関して次のようなことが言えるであろう。

- *je sais* と *je connais* には統語論的な機能分担が見られる。すなわち従属節を従える機能は *je sais* が担い、名詞を従える機能は *je connais* が担う。
- *je sais* と *je connais* の統語論的な機能には干渉域が見られる。本稿の話ことばコーパスにおいては、目的語が後続しない *je sais* と *je connais* においてそうした干渉が観察されると考えられる。

結論 —類義語教育への示唆—

本稿では、類義動詞 *savoir* / *connaître* の統語意味論的な分析について、先行研究を中心に概観し、そうした分析が実際の言語運用から距離を置いたものとどまっているという問題点を指摘した。さらに言語分析と言語使用データの突合せを行うべく、延べ201時間(111万語)に及ぶ現代フランス語の話ことばコーパスに現れる *je sais* と *je connais* の例を調査した。

その結果、*je sais* と *je connais* はそれぞれが統語論的な機能を分担しあっていた。つまり従属節を従える機能は *je sais* が担い、名詞を従える機能は *je connais* が担っていた。その一方で、*je sais* と *je connais* の統語論的機能には干渉域が見られた。本稿の話ことばコーパスにおいては、目的語が後続しない *je sais* と *je connais* においてそうした干渉が観察される。

以上のことを勘案するならば、類義動詞 *savoir* / *connaître* の文法的な解説は、まず従属節と名詞という2つの目的語要素のタイプを提示し、それぞれ *savoir* と *connaître* によって支配されることを解説し、話ことばではさらに目的語を持たない独立した使用例が多数みられる点に注意を喚起する必要があるであろう。この最後の点は現在の一般的な文法教本においてもあまり指摘されていないが、重要な言語運用の側面であると考えられる。

最後に、本稿が調査したのは、直説法現在の 1 人称単数形, *je sais* と *je connais* に過ぎず、しかも *je sais* は全件を調査したわけではない。さらにコーパスの規模も小さいため、言語使用のごく一部分しか分析の対象になっていない。今度、同様の分析をさらに全体的な言語使用データに拡大する必要があることは言うまでもない。

引用文献

- Delatour Y. et al. (2000). *Grammaire pratique du français en 80 fiches*, Paris, Hachette.
- Dhorne F. (1986). 「「知る」「分かる」と「savoir」「connaître」」, 日仏語の基本語彙の対照言語学的研究論集, 昭和 58-60 年度科研による研究成果報告総合研究(A) 60301067, 国立国語研究所, pp.85-92.
- Grégoire M. et Thiévenaz O. (1995). *Grammaire progressive du français avec 500 exercices*, CLE international.
- Picoche J. et Rolland J.-C. (2002). *Dictionnaire du français usuel*, Bruxelles, Duculot-De Boeck.
- Pougeoise M. (1996). *Dictionnaire didactique de la langue française*, Paris, Armand Colin.
- Rémy-Giraud, S. (1986). “Etude comparée du fonctionnement syntaxique et sémantique des verbes savoir et connaître”, *Sur le verbe*, Rémy-Giraud S. et Le Guern M. (dirs.), Presses Universitaires de Lyon, pp.169-306.
- Tamba-Mecz I. et Dhorne F. (1988). “Analyse de deux paires synonymiques en français et en japonais: CONNAÎTRE/SAVOIR-SHIRU/WAKARU”, *Linguistique japonaise*, 2, pp.7-41.
- Trubert T. et Oguma K. (1992). “CONNAÎTRE ET SAVOIR DANS LA STRUCTURE SVO”, 西南学院大学フランス語フランス文学論集 28, pp.163-172.

資料 1

je connais ～の目的語（生物名詞）

生物名詞	出現回数
personnes	10
gens	10
quelqu'un	5
ceux	5
père	3
jeunes	3
famille	3
celui-là	3
camarades	3
personne	2
ouvriers	2
monde	2
jeune fille	2
élèves	3
vieux	1
un	1
tous	1
seigneur	1
professeur	1
petits	1
parents	1
Orléanais	1
monsieur	1
militants	1
maire	1
instituteurs	1

gros	1
Français	1
filles	1
directeur	1
dames	1
dame	1
bourgeois	1
合計	75

je connais ～の目的語（無生物名詞）

無生物名詞	出現回数
pays	4
mots	3
système	2
méthodes	2
latin	2
langues	2
institutions	2
anglais	2
ville	1
type d'enseignement	1
Troyes	1
travail	1
Tours	1
situation	1
sens	1
rien	1
reste	1
quartiers	1
petit bois	1
passé	1
omelettes	1
normes	1
nom	1
montagne	1
milieu rural	1
langue étrangère	1
langue	1
îles britanniques	1

histoire	1
grand-chose	1
godasses	1
Ghattyney	1
français	1
église	1
école	1
difference	1
château	1
celle de gauche	1
Bretagne	1
bouquins	1
boulevard	1
art d'écrire	1
合計	53

資料 2

savoir / connaître の言語運用データの検索結果

1. オルレアン・コーパス

1968-1971 年にかけてイギリスのフランス語教員たちがオルレアン(Orléans)で行った延べ 315 時間 (約 450 万語) の大規模な録音調査を言い, 「オルレアンに関する社会言語学研究 Etude Sociolinguistique sur Orléans, E.S.L.O.」と称される。ELICOP では現在, 約 80 時間 (約 90 万語) が文字化されており検索可能である。

2. トゥール・コーパス

1975 年にイギリスのフランス語教員たちがトゥール(Tours)で行った調査のことで, 一般には「トゥールの口頭本 Le Livre Parlé de Tours」と呼ばれる。69 の職種に就く 193 名のトゥール在住者が協力し, 延べ 120 時間の録音が行われた。現在は対面会話の部分の約 4 時間 (3 万 6 千語) が文字化されている。

3. オーヴェルニュ・コーパス

同じくイギリスのフランス語教員養成講座の教員たちが 1976 年にクレルモン・フェラン(Clermont-Ferrand)で行った調査を言う。「オーヴェルニュの声 Voix d'Auvergne」と称され, 約 52 時間の録音で, このうち 17 時間強 (17 万 7 千語) が文字化されている。

したがって, ここに解説する話言葉のコーパスは延べ 201 時間 (111 万語) の会話を文字化した資料体である。

参考 <http://bach.arts.kuleuven.ac.be/elicop/>

je sais (オーヴェルニュ・コーパス)

File=auvergne/faf12rh1.txt

- [1] <sp who="A04" nr=100> chrétiens non chrétiens <sp who="F05" nr=101> oui **je sais** je sais mais de toute manière <sp who="A04" nr=102> croyants non croyants etcetera est-ce que quelque chose a changé []
- [2] <sp who="A04" nr=128> je suppose euh qu' ils vous disent euh ce n' est pas le seigneur qui me qui me donne mon salaire c' est le patron <sp who="F05" nr=129> oui **je sais** mais enfin c' est c' est p c' est pas cela le le problème c' est que on fait plus les mêmes choses on on a on a plus les mêmes langages qu' eux et c' est ce qui crée cette différence souvent euh disons qu' on euh